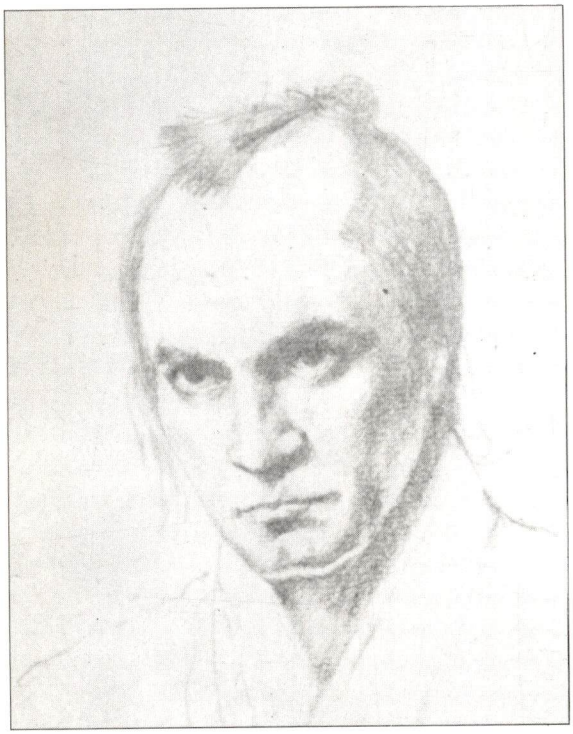
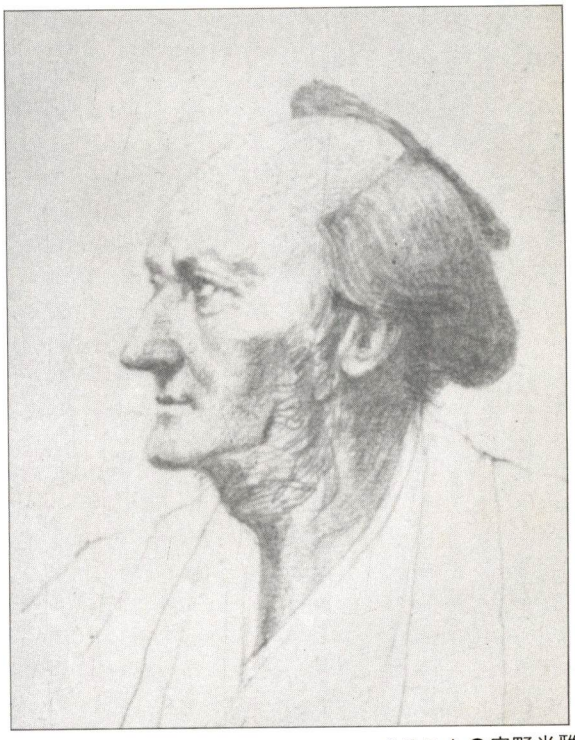
新交響楽団104回演奏会

1984年6月24日(日)2時
新宿文化センター

指揮：山田一雄





イラスト●安野光雅

ベートーヴェン

L.V. Beethoven

交響曲第3番変ホ長調《英雄》

Ⅰ. Allegro con brio
Ⅱ. Marcia funebre: Adagio assai
Ⅲ. Scherzo: Allegro vivace
Ⅳ. Finale: Allegro molto

ワーグナー

R. Wagner

楽劇《ニーベルングの指環》第3夜《神々の黄昏》よ

序奏／夜明けとジークフリートのラインへの旅／ジークフリートの葬送行進曲／ブリュンヒルデの自己犠牲と終末の音楽

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）

交響曲第3番変ホ長調作品55「英雄」

作曲年代：1803年
初　　演：1805年4月7日　ベートーヴェン指揮，アン・デア・ヴィーン劇場にて
楽器編成：フルート2，オーボエ2，クラリネット2，ファゴット2，ホルン3，トランペット2，ティンパニ，弦5部

「彼も俗物にすぎなかったのか」ナポレオンのフランス皇帝即位の報に接し，激怒したベートーヴェンは，この「ボナパルトに捧げる大交響曲」のボナパルトの部分を乱暴に抹消した。(事実、この穴のあいてしまった自筆譜は，破り棄てられることなく，ウィーン楽友協会に保管されている）しかし，その2年後に出版された時には，「シンフォニア・エロイカ」(英雄交響曲）というタイトルに「ある偉人の思い出のために」がイタリア語で添えられており，このナポレオンに関するエピソードが，単にエピソードに終っていないことを物語っている。

――私は殆ど絶望し，もう少しで自殺するところだっ

た。ただ，彼女が――芸術が，私をひきとめた。私は自分に課せられたと感ずる創造を全部やり遂げずにこの世を去ることはできない。――1802年に書かれたハイリゲンシュタットの遺書は，不治の難聴による深い絶望感に支配された危機の時代を総括したものであると解することができる。そうした不撓の精神をもって乗りこえてゆこうとした時，人類の尊厳を守る自由精神を尊ぶベートーヴェンが，ある一時期にせよ，ナポレオンにその理想を見出し大いに触発されて，完成したのがこの曲である。しかし，単にナポレオンをモデルにした曲ではなく，ナポレオンを通して自らのヒロイズムの自覚，すなわち自分に課せられた創造をやり遂げなければならないという，いわば“神がかり”的な任務感がこの曲の動機となっている。これに加え，当時の音楽文化の様相の変化にも注目する必要がある。この変化の兆しは既にモーツァルト時代から見せているが，音楽の場をとってみても，それまでの教会や宮廷といった極く限られた閉鎖的な空間から，演奏会場へとその中心を移し始め，これに伴ない作曲家自身の意識の中にも，封建的な社会の中での，いわば従僕的な立場から，広く多くの人々の為に，芸術の創造という崇高な使命を持った専門家としての自覚を持つようになってきた。こうした様々の要因の中で生まれたこの曲は，ハイドン，モーツァルトから継承した交響曲の系譜をはるかに超越した作品として，その後の交響曲のあるべき姿を決定づけており，同時に新しいタイプの作曲家の誕生を告げている。

実際，この曲は，かつて見られなかったほど，入念かつ精密に組み立てられた強固な構造をもっており，また管弦楽法についても，初めてホルンが3本用いられ，コントラバスをチェロとのユニゾンから分離した他，木管楽器やティンパニの用法についても漸新なものとなっている。しかし，当時の楽器の性能の低さから，あきらかに“言葉足らず”と思われる個所，拡大された今日のオーケストラの編成ではバランスの上で補足を要する個所などについては，19世紀の大指揮者ハンス・フォン・ビューローをはじめ，ワインガルトナーなどの加筆によって演奏されるのが通例となっている。

初演は1805年，ウィーンで作曲者自身の指揮。しかし前述のように，従来の常識をはるかに超えた作品であった為，評判は芳しくなく，ライプツィッヒの「一般音楽新聞」は，曲が長すぎ，明るさに乏しい点を指摘した後，「広く親しまれるためには，まだ多くのことが不足している」と結んだ。しかし，ベートーヴェン自身，第9を作曲するまでは自分の最も気に入っている作品はエロイカだと答えており，今日では9つの交響曲中，第9と並ぶ最高傑作とされている。

第1楽章：全奏による2つの和音に続くチェロによる第一主題がこの楽章を支配する。特に展開部は荘大で充実しており，この全く新しい交響曲を象徴している。また，入念なコーダも，この堂々たる楽章をしめくくるにふさわしい。

第2楽章：この葬送行進曲の誕生は早く，1801年に最初のスケッチが見られる。ナポレオンではなく，あるイギリスの軍人の死が動機となったと言われている。木管楽器が有効に使われ，弦との鮮やかな色彩対照を聞かせる。

第3楽章：それまでの交響曲にしばしば用いられた舞曲，メヌエットではなく，2番と同じくスケルツォが置かれ，全体の構造をより厳格なものにしている。中間部のホルンのトリオが聞きものである。

第4楽章：1801年に作曲されたバレー曲「プロメテウスの創造物」と同じ主題による大規模な変奏曲。ギリシャ神話の英雄によるテーマは，フーガの手法を用いてコーダに至るまで自由かつ巧妙に変奏され，急にプレストに転じてクライマックスを築き，輝かしい勝利のうちに全曲を閉じる。

（上原　誠）

リヒャルト・ワーグナー（1813～1883）

楽劇「ニーベルングの指環」第3夜「神々の黄昏」より

作曲年代：1874年

初　　演：1876年8月17日　ハンス・リヒター指揮，バイロイト祝祭劇場にて

楽器編成：ピッコロ，フルート3，オーボエ3，イングリッシュホルン，クラリネット3，バスクラリネット，ファゴット3，ホルン8（うち5～8番はワーグナーチューバ持ち替え），トランペット3，バストランペット，トロンボーン4，テューバ，ティンパニ（2人），中太鼓，シンバル，トライアングル，タムタム，鉄琴，ハープ6（2パート），弦5部

物語と音楽

冒頭，管楽器群が“世界へのあいさつの動機”（譜①）の和音を強奏する。これは炎に閉ざされて眠っていたブリュンヒルデが，英雄ジークフリートの接吻で目を開く光景（第2夜「ジークフリート」）と同じものだが，半音低い変ホ短調の暗い不吉な響きに変わっている。ただちに三人の運命の女神“ノルンの動機”（譜②）が現れ，繰り返しの後，“運命の動機”（譜③：「神々のたそがれ」全体を一貫して流れる中核的主題）がバス・トランペットで不気味に奏される。時は夜中，ノルンたちは，“運命の綱”（譜④）を編みながら，これまでのいきさつを代わるがわる歌う。――大神ヴォータンは永遠の神々の世界を支えていた神木の枝を折って槍を作り，世界支配の野望を実現する。ニーベルング族の矮人（こびと）アルベリヒは“愛の力を断念”し

たことによってラインの乙女達から黄金を奪って指環を作り無限の権力を得んとしたところ，ヴォータンら神々に横取りされて指環に“死の呪い”をかける。こうして黄金に象徴される権力への欲求がもととなって神々の世は破滅へ向かって進み始める。しかしヴォータンは悩みつつ，人間界にけがれなき英雄を創造して，この運命に逆らおうとする。彼はワルキューレたちやウェルズング族を生み，多くの犠牲の中から望み通り英雄ジークフリートが誕生するが，“神々のたそがれ”は避けられそうもない。――黄金の呪いが人々の運命を支配している――

父ヴォータンの罪を被って炎に閉じ込められ，眠らされていたワルキューレの娘ブリュンヒルデは，炎を越えて来た英雄ジークフリートに目醒めさせられ，二人は共に愛を誓い歌った。舞台では今，闇夜が去りつつあり二人のいる石室が見えてきた。《暁の訪れ》の場面。ジークフリート(譜⑤)とブリュンヒルデ(譜⑥)は共に立って黄金の朝日に包まれている。やがてジークフリートは愛を誓いつつも妻に別れを告げ，新天地を求めて旅立つ。この《ジークフリートのラインへの旅》では，二人の主題(⑤,⑥)，ジークフリートの角笛(譜⑤)，愛の決心の動機(譜⑦)，生成の動機(譜②)，が次々と鳴り響いた後，ラインの黄金(譜⑧)が現れ，その呪いが運命を支配していることを示し不吉な前途を物語る。

以下ジークフリートの死に至る経緯が「神々のたそがれ」の本文の大半を占めるが，本演奏会では省略される。(本抜粋の前半の終り)

後半はジークフリートが息絶える前に生涯で最も美しい思い出，ブリュンヒルデとの出会いを回想して歌う場面で始まる。(譜①：冒頭より半音高い明るく澄んだ響)そして《ジークフリートの葬送行進曲》。5本のテューバの粛かな響きに始まり，ジークフリートの主題が様々に姿を変えて悲痛に崇高に叫ばれる。彼の死をまだ知らぬ者の不安を表して，この部分は終わる。

最後は，Trp・Trbのff(譜⑨)に始まる《ブリュンヒルデの自己犠牲》から終幕へと続く。ブリュンヒルデは夫を失った悲しみのあまり絶望して自殺するのでは決してない。何のけがれも無い英雄ジークフリートへの無限の愛を成就するために，愛馬にまたがり(譜⑩)歓喜にあふれて夫の燃える炎に跳び込むのだ。この人類を代表する愛の行為＝自己犠牲が神々の世を終わらせ，新しい愛の支配する世界をもたらすのだ。

ブリュンヒルデが決意を物語る間音楽は次第に盛り上がり，Trb→Trpと騎行の動機(⑩)が跳躍するとき彼女は炎に躍り込む。その瞬間炎は爆音を立てて燃えあがり，人々のいる広間を襲う。人々は逃げるが，突然地上の火は消えて煙だけとなり，それもやがて黒雲となって消える。ライン河が突如膨れ上がって辺りに押し寄せ，その上をラインの乙女達が楽しげに泳いで来る。ジークフリートを殺して指環を奪った矮人ハーゲンは驚き怖れて潮に跳び込み，「指環に近づくな！」と叫ぶ。それを最後に彼は乙女達に深みへひきずり込まれてしまう。指環＝黄金は元に戻り，呪いは解けた。空には極光が現れ次第に強さを増してゆく。ライン河は鎮まり，人々が感動して見守る中，燃えさかる天上の炎の中に神々の集っているワルハラの宮殿(譜⑫)が見えてくる。再び地上から紅蓮の炎が巻き起こって，神々を包み込む。音楽は変ニ長調の平安に向かい(“神々のたそがれの和音”：譜⑬)，ハープのアルペジオを伴って，壮厳に「ニーベルングの指環」全曲の幕となる。
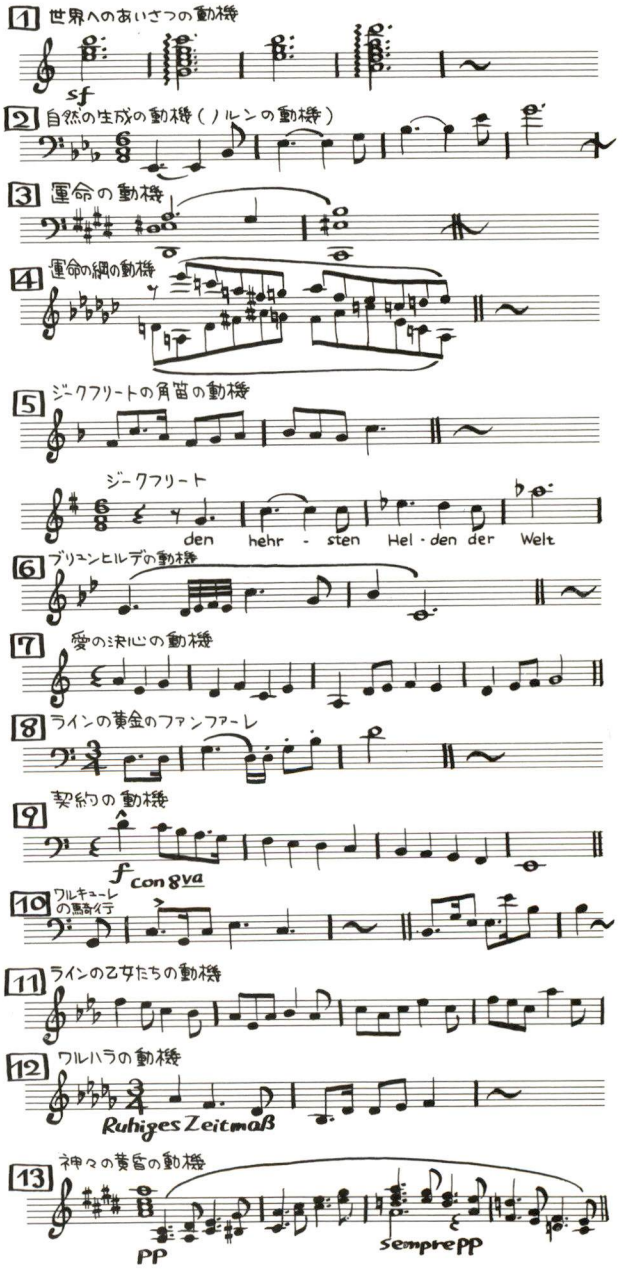
(野村直之)



